

おまけに壁の土が、室内の乾燥の度合に応じて湿気を吸い取ったり、逆に吐き出したりして調節してくれる。冬暖かく夏涼しい、エアコンも除湿機もいらぬストローベイル・ハウスは、いわば壁全体が呼吸をしている温熟調節装置なのだ。

でもこの建築のいいところは、ただ健康や環境に優しいことばかりじゃない。今の住宅が忘れてきたいろいろなものを思い出させ、再生させる建築なのである。

……人と人、人と地域をつなぐ家

ストローベイル・ハウスはアメリカで生まれた建築様式だ。だがぼくがめざすわらの家は、ただよその国のまねをすることではない。日本の田んぼのわらと日本の森の木を組み合わせ、もともとその土地にあった素材やすぐれた伝統的な知恵と技術を生かし、日本の風土に合ったわらの家をつくることだ。

ぼくがこれまで設計したわらの家では、わらブロックを木造部に固定するのに、伝統的な土蔵造りからヒントをもらった下げ縄でしぼる方法と、細い竹を格子に組んで固定する方法を採用している。屋根裏と床下には虫除け効果と断熱効果を期待して、いぶしたモミガラを詰めたものもある。ペンキを使わず、杉板を一枚一枚バーナーで真っ黒に焼いて壁に張ったり、土と砂利をたたいて玄関の土間にもしたりだ。地域の職人たちの記憶の中には、豊かでエコロジカルな知恵とすぐれた技術がまだまだしっかり生きている。

わらの家では建て主が率先し、地元の職人、友人や素人のボランティアの人たちも協力して、わらを積んで固定し、土を塗る。さまざまな意識をもって集まってきた人たちといっしょに、建て主みずから汗を流し家づくりに関わることは、家と住み手の関係を見直し、家族がつながり直し、家への愛着を育てる上で大きな意味があるからだ。

これまでに設計したわらの家でワークショップを企画しインターネットで募集したら、どれも大勢の人たちが参加してくれた。手弁当で参加する彼らの思いはさまざまだ。今の住宅や環境に疑問や不安を感じている人、家づくりの喜びを体験したい人、将来のエコ村づくりをにらんでわらの家のつくり方を勉強しに来る人、わらや土を何となくさわってみたい人。

初め緊張していた人も、わらにまみれ、子ど



ストローベイルの土壁に“宝物”をはめ込んで遊ぶ